



Title	モンゴルにおける日本語教育の現状と課題
Author(s)	ヒシグデルゲル, B.
Citation	モンゴル研究. 2012, 27, p. 19-23
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102374
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

モンゴルにおける日本語教育の現状と課題

B.ヒシグデルゲル

はじめに

モンゴルと日本の友好関係は近年、幅広い分野で発展している。本年は両国の外交関係樹立 40 周年の年であり、その一環で S. バトボルドモンゴル国元首相が日本政府の招請により 2012 年 3 月 10 日から 15 日までの日程で日本国を訪問した。訪問中様々な分野について会談が行われ、人的交流・文化交流が一步進んだことを強調した。日本側は 2010 年にモンゴル側が開始した、モンゴルに短期滞在する日本国民に対する査証免除措置を高く評価するとともに、バトボルド首相の今次訪日に際して、在大阪モンゴル国総領事館が開館することを歓迎したようだ。

このように両国の交流が益々盛んになっていることに従い、日本語を学習する青少年は少なくない。モンゴルにおける外国語学習の選択状況から見ると、英語を第一外国語とした場合、第二外国語には中国語、日本語、韓国語などアジアの言葉を選ぶ傾向がある。

2009 年時点で、世界の 126 カ国 7 地域で、約 300 万人が日本語を学習しているが、モンゴルでは、約 1 万 2000 人が日本語を学習している。

本稿では、モンゴルにおける日本語教育の現状と課題を考察する。

課題として、

- I. 日本語教育の歴史
- II. 言語的側面、その有利な点と不利な点
- III. モンゴルにおける日本語教育の今後の課題 をとりあげる。

I. 日本語教育の歴史

モンゴル人(モンゴル国)への日本語教育の歴史は、以下の三つの段階に大まかに分けることができる。

1. 第二次世界大戦前のモンゴル人への日本語教育(1945 年迄)
2. 第二次世界大戦以降のモンゴル人への日本語教育(1945 年から 1990 年)
3. 民主主義化されてからのモンゴルでの日本語教育(1990 年以降)

1. 第二次世界大戦前のモンゴル人への日本語教育(1945 年迄)

モンゴル人への日本語教育の歴史は比較的新しい。第二次世界大戦前、1932 年に日本は「満州国」の内モンゴル人居住区(いわゆる「蒙古連合自治政府」支配地域)で日本語教育を行っていた。

当時の日本語教育の問題点を述べてみよう。

- ①植民地主義的強制教育であった、
- ②教師は大陸侵略の尖兵(=「文化戦士」)であった、
- ③教科課程が不完全だった、
- ④教材が不足していた、などから考えてみれば、日本語教育には当時の社会経済および、政治情勢が反映していたことがわかる。

当時、日本語教育の問題点としてよく取り上げられたのは教員の問題であった。

例えば、

- ①転職する教員が多いこと、
- ②教員の交流の減少、
- ③身分の不安定さ、
- ④教育行政官の質の低下、
- ⑤派遣教員の斡旋の仕方に問題があること、などであった。

日本語教育関係者の数は千人から数千人上で、日本語教育よりも政治方面に目を向けるものも多く、正しい日本語を使えず、経験不足の教員も多かった。その上、排日運動＝民族的抵抗が強かったため、日本語教育はそれほど効果的ではなかった。

2. 第二次世界大戦以降のモンゴル人への日本語教育 (1945年から1990年)

1921年の人民革命以降、日本とモンゴルは正式の国交がとだえた。両国の国交断絶により日本語教育は様々な制約を受けることになった。

1949年に中華人民共和国が成立し、内モンゴル自治区では漢字への日常的接触が増え、日本語教育の扉が徐々に開かれていった。一方、モンゴル人民共和国(モンゴルの旧国名)においては、キリル文字化が進み漢字への接触もほとんどなく、日本語教育は不利な状況に置かれた。モンゴルでは、旧ソ連での方法に準拠して、少数精鋭主義(=少数の日本・日本語専門家養成)による日本・日本語教育が行われた。その目的は、敵性国家(=日本)の実情を知ることにあった。

1970年初頭、モンゴル・日本の外交関係の樹立に伴い、モンゴル国立大学で日本および日本語研究・教育専門家の養成(1年間に5～6人)が始まった。日本人の教官は、毎年1人、招聘された。

だが、日本語教育は一般的なものではなく、第二外国語ですらなかった。

3. 民主主義化されてからのモンゴルでの日本語教育 (1990年以降)

1989年末、モンゴルで民主化運動が起こり、1992年には社会主義を完全に放棄した。急速に社会の民主化が進む中、社会の仕組みが大きく変わり、数多くの青年に日本語を学習する強い動機を与えた。

モンゴルと日本の交流が深まり始めるのにもとない、日本語および日本語教育が盛んになった。初等・中等学校で、第二外国語として日本語教育が開始された。

しかし、

- ①大学などの高等教育との接点(=継続性)がないこと、
- ②モンゴル人に適合した教科書がないこと、
- ③教員の質、

④大学などの高等教育機関では、初等・中等教育とは無関係に、日本語教育が行われていること、などの問題点がある。

現時点で、日本・日本語教育専門家の質と量は十分とはいえない。また、例えば、クラス編成の工夫などを行うことによって、初等・中等教育および高等教育間の、日本語教育の一貫性と関連性を強める必要がある。

II. 言語的側面、その有利な点と不利な点

モンゴル語と日本語は言語構造に類似性があり、モンゴル人にとっては他の外国語より日本語の方が学習し易いといった認識がある。

モンゴル人が日本語を学習する際に有利な点を以下に挙げる。

①言語構造の類似性による読解(日本語からモンゴル語へ)の容易さ

文の語順が似ているので、単語を覚えていればその文を訳せる。

②モンゴル語発音の多様性と日本語発音の単純性による日本語発音の容易さ

例：“LとR”(лとр)

‘бааярлалаа’(ありがとうの意味)

③「子音」+「母音」の規則性

モンゴル語における「発音」の不規則性は少ない。

(日)ゾリック→(モ)зориг

④モンゴル人の口承文芸的伝統による「暗唱」の習慣

文法(文型)学習、会話学習の容易さ

次に、日本語学習者の間にみられる不利な点を考えてみよう。初級学習者においては、微妙な差異による誤りが多い。

①助詞の誤用

例1：「が」と「は」の混乱

モンゴル語には「が」「は」に当たるものはない。

例2：「に」と「から」の誤用

(モ)-аас асуух、(日)「に」+きく(先生に聞く)

日本語の「先生に聞く」というのはモンゴル語の表現では「先生から聞く」になる。

例3：主語における助詞の省略

「これ本です」(×)

例4：目的語における助詞の省略

「本読みます」(×)

②構文の誤用

例1：「形容詞+です」

「よい」+「でした」(×)

モンゴル語の形容詞には活用がない。

例2：「～と思います」

「～だと思います」(×)

③漢字の困難性

モンゴル語は漢字を使わない地域の言語になるため、モンゴル人にとって漢字学習は困難を伴う問題となる。とりわけ、漢字の訓読、音読、多義性による学習者の混乱が多くみられる。

例：「本」：もと、ホン、ボン、ボン

Ⅲ. モンゴルにおける日本語教育の今後の課題

日本語の環境に触れる機会が少ない自国で日本語を教えている我々モンゴル人教師の努力は、日本語教育の発展に重要である。モンゴル人の心理的な特徴に適した教授法の工夫や教員相互の経験の交換、教師による日本研究は日本語教育の質の向上に貢献するに違いない。一例として、モンゴル国立大学言語文化学部、モンゴル・日本研究学科の一年生の学生を対象として試みている漢字の指導法を紹介しよう。

モンゴル人は実際の傾向が強く、何でも自分の目で見て、手で触ってから信用するといった心理的な特色がある。だから漢字を教える際、この特色に注目し、以下の順序による漢字の授業の指導法を考えた。

成り立ち⇒書き順⇒読み方⇒使い方

成り立ち：漢字の成り立ち、その意味を自作の絵や図などを使用し説明する。

書き順：漢字の書き方を画数どおりに指示する。

読み方：漢字の音読みと訓読みを全部一度に教える。

使い方：単語および熟語の使い方を例文で説明する。

この指導法のポイントは「成り立ち」にある。漢字をモンゴル語の訳で説明するより絵や図などの教材を使用しながら説明した方が覚えやすい上、忘れた場合思い出しやすいことが観察された。この方法を授業に採用してから、以前より学生たちの漢字の学習速度は上がり、覚える漢字の数も増えた。

また、今後の課題として、モンゴル人向けの日本語教科書、教材の開発がある。弱点に対する重点教育の必要性を考えると、日本で出版されたモンゴル語からの翻訳書、日本語モンゴル語を対照して読めるような文献を教材として活用することがあげられる。また、助詞や慣用句、敬語などの誤りやすい点をモンゴル語で解説した参考書が必要である。

なお、モンゴル人教員の母語知識を高めることは、モンゴル語と日本語を比較しながら解説することや言語そのものの理解を深めるために、不可欠であることは言うまでもない。

おわりに

以上、モンゴルにおける日本語教育の現状を概観した。ここで述べたモンゴルにおける日本語教育をめぐる諸問題については、モンゴルのみならず、世界の他の国々も同様の課題を抱えていると推測される。ただし、これらの問題の解決に当たっては、他国の日本語教育における成果を生かしながら、自国

の学習者の特性を考慮した教授法に取り組むことが重要となる。

本稿を手掛かりに、今後も日本語教育の在り方を考え、また、実践を積み重ねていきたい。

参考文献

1. 「内モンゴル・中国東北部におけるモンゴル人への日本語教育(戦前期)」、村井宗行、『帝塚山学園春秋』(第33号、1991年12月)、帝塚山学園
2. 「蒙疆政権下の対モンゴル人日本語教育について」、宝鉄梅、『現代社会文化研究』(第31号、2004年11月)、新潟大学
3. 『Survey Report on Japanese-Language Education Abroad 2009 海外の日本語教育の現状 日本語教育機関調査・2009年』
4. 『和文解釈・モンゴル編』(Японыг ойлгож Монголд буулгах нь, Улаанбаатар, 2008)、村井宗行、R. バトトクトフ、モンゴル国立大学出版局、2008年
5. Д.Цэрэнпил, Түгээмэл хэл зүй ба Монгол хэл, УБ-2011

(B. ひしぐでるげる モンゴル国立大学言語文化学部)